

2021年3月29日発行（通算第537号）

世界情勢ブリーフィング

<https://guccipost.co.jp/blog/jd/>

春眠暁をおぼえず、ということで、冬るときよりもむしろ朝起きるのがしんどくなりました（苦笑）。花粉症のせいもあるのでしょうか。夜寝る前に薬を飲んだ方が良さそうです。

先週は、オンラインサロンでかんべえさんと一緒にコラボ講演・懇親会を行いました。米中関係から米国内政、ミャンマー、小池知事、マーケット、競馬・・・と様々なトピックに話が及び、あっという間の1時間でした。

オンライン講演と意見交換は、参加者の方々とリアルタイムで率直に話ができ、活気と刺激があります。おなじみ経済ZAP!!のSaltさん、それに最近、鮮烈なブログ・デビューを飾った永田町ディープスロートさんも参加しています。ご関心のある方は、以下のオンラインサロンの紹介をご覧ください。

<https://guccipost.co.jp/blog/guccipost/?p=640>

かんべえさんとは、これからも色々なコラボをしたいと思っています。来月には日米首脳会談がありますが、その前後あたりで何か企画したいと思っています。決まりましたらお知らせしますので、楽しみにしてください。

先週の動き

3/21（日）

- ・オースティン国防長官がアフガンを電撃訪問（ガニ大統領と会談）
- ・フィリピンが中国漁船220隻の南沙諸島での集結を受けて中国に抗議

3/22（月）

- ・ブリンケン国務長官がベルギーを訪問（～25日）
- ・米財務省が中国（新疆ウイグル自治区での人権侵害に関与したとして中国政府当局者2人）とミャンマー（国軍幹部の2人と2団体）への制裁を発表
- ・EU外相理事会（中国（新疆ウイグル自治区での人権侵害に関与した中国政府当局者4人と「新疆生産建設兵団（XPCC）」の公安部）とミャンマー（クーデターに関与したミン・アウン・フライン国軍司令官ら11人）への制裁を発表）（ブリュッセル）
- ・英国とカナダが新疆ウイグル自治区での人権侵害に関与したとして中国政府当局者4人とXPCCの公安部への制裁を発表（英国は米英カナダの共同声明を発表）
- ・中国がEUの制裁への対抗措置として欧州議会関係者やドイツの研究者ら10人と4団体への制裁を発表
- ・中ロ外相会談（桂林）
- ・北京の裁判所がスパイ罪で起訴されたカナダ人のマイケル・コブリグ氏の非公開の審理
- ・コロラド州のボールダーのスーパーで銃撃事件

3/23（火）

- ・NATO外相理事会（ブリュッセル、～24日）

- ・米独外相会談（同）
- ・米上院軍事委員会がインド太平洋軍司令官（アキリーノ太平洋艦隊司令官）の指名承認公聴会を開催
- ・米下院金融サービス委員会の公聴会でイエレン財務長官が証言（法人税の引上げを支持）
- ・豪州とNZが米英カナダのウイグル制裁を歓迎する共同声明を発表
- ・北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長が習近平国家主席と口頭のメッセージを交換
- ・イスラエル総選挙
- ・スエズ運河でコンテナ船が座礁

3/24（水）

- ・バイデン大統領が不法移民の問題をハリス副大統領が担当すると発表
- ・プリンケン国務長官がフォンデアライエン欧州委員長とボレル外交安全保障上級代表と会談（ブリュッセル）
- ・米上院がトランスジェンダーを公言する医師レイチェル・レビン氏の厚生次官補指名を承認
- ・中国が「米国の人権侵害に関する報告書」を発表
- ・中国の王毅外相がサウジ、トルコ、イラン、UAE、バーレーン、オマーンを訪問（～30日）
- ・韓国が北朝鮮は3月21日に巡航ミサイル2発を発射していたと発表
- ・EUが新型コロナウイルスワクチンの輸出規制の強化策を発表
- ・英国とEUが新型コロナウイルス対策で協力するとの共同声明を発表
- ・ドイツのメルケル首相が3月23日に発表した復活祭期間中のロックダウン強化を撤回

3/25（木）

- ・バイデン大統領が就任後初の記者会見
- ・EU首脳会議（バイデン大統領が参加）（オンライン、～26日）
- ・米・ギリシャ首脳電話会談（ギリシャ独立200年記念日）
- ・米国と台湾が沿岸警備の協力強化に関する覚書に署名
- ・米上院が中小企業向けの支援措置「給与保護プログラム（PPP）」の5月末までの延長を可決
- ・ジョージア州で郵便投票を制限する法律が成立
- ・米下院エネルギー・商業委員会がネットのフェイクニュースに関する公聴会（FB、ツイッター、グーグルのCEOがオンラインで出席）
- ・台湾国防部が「中華民国110年四年期国防総検討（QDR）」を立法院に報告
- ・北朝鮮が弾道ミサイル2発を発射（日本のEEZ外に落下）
- ・韓口外相会談（ソウル）

3/26（金）

- ・米英首脳電話会談
- ・バイデン大統領が東アジア・太平洋担当国務次官補にダニエル・クリテンブリック駐ベトナム大使を指名
- ・中国が英国の制裁への対抗措置として英国の政界関係者ら9人と4団体への制裁を発表
- ・中国商務省が豪州産ワインに対し反ダンピングの制裁関税を課することを正式に決定したと発表
- ・台湾国防部が中国軍の戦闘機など計20機の防空識別圏（ADIZ）への侵入を発表
- ・北朝鮮の国防科学院が「新型戦術誘導弾（ミサイル）」の発射試験に成功したと国営朝鮮中央通信が報道
- ・北朝鮮の李炳哲朝鮮労働党書記が北朝鮮による短距離弾道ミサイルの発射は国連決議に違反するとのバイデン大統領の批判を非難する発言を国営朝鮮中央通信が報道

3/27（土）

- ・中国が米国とカナダの制裁への対抗措置として米国際宗教自由委員会の幹部2人とカナダの下院議員1人と下院小委員会への制裁を発表
- ・中国とイランが25年間の4000億ドルの中国投資を含む協力協定を締結
- ・ミャンマー国軍記念日

●バイデンの初の記者会見

バイデン大統領の就任後初の記者会見が行われました。就任65日目の会見は、歴代大統領で最も遅い開催に

なります。バイデンは質疑応答を中心に、色々なことを語りました。

まず新型コロナウイルス対策について、政権発足から100日間で1億回のワクチン接種を目指すとしていた当初の目標を2億回とすると述べました。

移民がメキシコとの国境に押し寄せている問題については、自分が「良い人」だから移民が増えているというのであれば喜ぶことだが、そうではない、移民の増加は毎年起こっていることだと指摘。トランプ政権の政策の一部を撤回したことについて「謝ることはしない」と明言しました。

フィリバスターについては、「私が上院にやってきた120年前のときのように（注：冗談）昔の状態に戻す必要がある」として、改革を求める考えを表明しました。

中国については、「21世紀における民主主義と専制主義の戦い」「衝突は望んでいないが厳しい競争になる」「中国は世界のリーダーとなり、最も豊かで強い国になるという目標を持っているが、私が大統領でいるかぎり、そうはさせない」と発言。習近平国家主席については、「昔からよく知っている。非常に率直で、民主主義の骨がないが、スマートな人物だ。プーチンのように、民主主義は機能せず、専制主義がこれからの潮流と考えている」と評しました。

また、民主主義サミットの構想を述べた上で、中国が国際的なルールに従うようにする必要がある、それは南シナ海でも「北シナ海」（注：東シナ海の言い間違い）でも台湾でも、他の問題でもそうだ、と述べました。
<https://twitter.com/dcexaminer/status/1375158774298599427>

北朝鮮による短距離弾道ミサイルの発射については、国連安保理決議に違反すると批判。彼らがエスカレートを選べば相応に対抗措置をとるが、同盟国と相談しながら外交も行くと述べました。

アフガン駐留米軍の撤退を巡っては、5月1日の期限までに完全に撤退するのは困難と断言。撤収の時期については明言しなかったものの、22年に米軍がなお残っているとは考えていないと述べました。

また、24年の大統領選に再選を目指して出馬する意向を表明しました。

今回の記者会見についてコメントします（※メルマガに限定）。

まず、全体的に、無難な会見でした。こちらに一部の動画がありますが、落ち着いており、ジョークが多かったこともわかります。トランプ前大統領については、「前任者は今頃からすでに再選キャンペーンを始めていたが」と聞かれるとき、「ハハ、私の前任者はそれを必要としていたからね。前任者・・・ああ、彼がいなくてさびしいよ」と語りました。

<https://twitter.com/bbcnewsjapan/status/1375292554015432707>

言い間違いは結構ありました。それは、以下のホワイトハウスのトランスクリプトを見れば分かります。国務省の会見もそうですが、このように、言い間違いのみならず、「笑」「聞こえない」など、すべて完全に記録に残るのが米国のすごいところです。

<https://www.whitehouse.gov/briefing-room/speeches-remarks/2021/03/25/remarks-by-president-biden-in-press-conference/>

「北シナ海」の言い間違いは、日本としては残念な話です。しかし、当然のことながら、米国から遠いアジアの地名を間違えたところで、国内では全く問題になりません。「南シナ海」ともう一つの海はといえば、「南」だから「北」・・・と口がすべったのでしょうか。バイデンほどの外交通であれば正確に話して欲しかったところですが、それでも、ここをあげつらう必要はないと思います。

Foxは、バイデンが分厚いノートを用意し、さかんに参照していたことを揶揄しています。「それに比べると、トランプ前大統領は、メモや準備をせずとも、いつも当意即妙に答えていた」という、よく分からないアピールもしています。これは、裏を返せば、それぐらいしか突っ込みどころがなかったことを示唆していま

す。

<https://twitter.com/JDWorldBriefing/status/1375277448842027014>

内容についていえば、最も注目に値するのは、やはり中国に関する発言です。従来のラインどおりではあるものの、バイデンの公式な発言の中では、おそらくこれまでで最も広汎かつ断定的に話しました。

特に中国の専制主義と人権問題に断固たる態度を示し、民主国家・同盟国を結集する姿勢をアピールした点が強く印象付けられました。その中でもウイグルの人権問題については、次項で述べますが、バイデン政権の一步も引くつもりがない姿勢があらためて示され、どこで落ち着くのかまったく分からない状況です。

今の米中は、二国間で話し合うモードではなく、それぞれが第三国からの支持を得ることに腐心している状況です。中国も、王毅外相が中東を訪問し、イランと大型の協力協定を締結しています。米中外相級会談において米国が挙げた協力のテーマは、以下の記事で述べたとおり、イラン、北朝鮮、アフガニスタン、気候でしたが、これは、米国の視点から、中国の協力を期待したい（利用できる）と考えられたテーマを並べただけで、具体的な協力が進む保証はまったくないことが示されたといえます。

- ・「米中外相級会談」（3/24）
<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=9192>

先週、バイデンは、4月22日～23日の気候変動サミットに中国を招待したことを発表しました。米中間で対話ができるとすれば、現時点ではここしか期待できません。そのぐらい米中の溝は深い状態です。

最後に、24年大統領選で再選を目指す、という発言は驚くにあたりません。再選を目指さず一任期、と言ってしまうと、レームダックになってしまうので、真意はどうあれ、今の時点ではこう言うしかありません。当然のことです。

●ウイグル問題をめぐる中国と欧米の対立

中国の新疆ウイグル自治区での人権侵害問題について、EU、英国、カナダが足並みをそろえて制裁に踏み切りました。米国はトランプ政権のときに新疆ウイグル自治区のトップである陳全国・共産党委員会書記（政治局委員）と「新疆生産建設兵団（XPCC）」に制裁を科しており（以下の記事参照）、それにキャッチアップするものになります。

- ・「米国の対中制裁の強化」（20/7/14）
<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=8621>
- ・「ウイグルの新疆生産建設兵団（XPCC）への制裁」（20/8/3）
<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=8659>

これに対し、中国はすかさず対抗措置を繰り出しました。EU、英国、カナダ、米国に対し、それぞれ議会関係者や研究者に制裁を科しました。

また、中国の外交官たちは、SNSで英国のデモや米国のグアンタナモ収容所での人権侵害問題を取り上げ、さらに「米国の人権侵害に関する報告書」なる文書を発表。

さらに、H&Mとナイキがウイグル族の強制労働について懸念を表明したことを受け、中国のメディアやSNSが反発し、非難キャンペーンを始めました。主要通販サイトであるピン多多（ピンドウオドウオ）、京東（JDドットコム）、天猫（Tモール）はH&Mの製品の取り扱いをやめたと報じられています。

ウイグル問題をめぐる対立についてコメントします（※メルマガに限定）。

EUが中国に制裁を行うのは89年の天安門事件以来。その内容は、XPCCについては公安部に限定され、また陳全国には及んでおらず、米国の制裁よりはランクを落としています。初めての制裁ということで、慎重に判

断したのでしょう。英国とカナダもこれに合わせています。

とはいえ、極めて大きな意味のある措置です。制裁を行ったことはもちろん、米・カナダ・EU・英国が足並みをそろえたことに大きな意味があります。制裁には踏み切らずとも、豪州とNZも制裁を支持する声明を出しており、ウイグル問題については完全に歩調をあわせていることが読み取れます。その背景として、もともとウイグル問題については欧州で関心が高かったことがあります。バイデン政権の多国間外交が功を奏しているのでしょう。

中国の対抗措置は例によって条件反射的なもので、驚きはありませんが、それにしても事態をエスカレートさせるだけの稚拙なものであったように見えます。EUについては、オランダ、ベルギー、リトアニア各国議会の議員のほか、欧州議会の緑の党とS&Dの議員を狙い撃ちにしましたが、彼らはそれぞれドイツ人とフランス人の議員です。これでEUやベルギーのみならず、よりによってドイツとフランスという主要国を敵に回すことになります。

さらに、中国に批判的な民間人研究者をターゲットにしたことも相当に挑発的でした。ドイツのマース外相は「民主主義に対する制裁だ」と強烈に非難しています。中国は、これ以前にも、フランス人の研究者を威嚇する言動に及んでいます（以下のリンク参照）。こうした民間人研究者への個人攻撃は常軌を逸したものであり、ドイツとフランスの態度を相当に硬化させることになります。

<https://twitter.com/JDWorldBriefing/status/1373442156682043392>

中国がウイグル問題について譲歩を示すことは現時点では到底想像できず、米国やEUも手を緩めることはないでしょう。したがって、この対立は出口が見えず、お互いに非難を強める状況が続くことは確実です。現時点での見通しは不透明ですが、状況によっては、EUと英国が米国並みの制裁水準まで上げてくる可能性もあるように思います。

また、北京オリンピックのボイコットにつながる可能性もあります。現時点でボイコットを表明している国はなく、今後もそこまで至る可能性は低いと思いますが、中国の反応があまりにも強硬で、双方の非難がエスカレートし、さらに米中対立が悪化すれば、万が一の可能性も出てきます。そのぐらいこの問題は深刻なリスクになりつつあります。

そして、EUと中国の関係について言えば、最も気になるのは、包括的投資協定（CAI）の承認（以下の記事参照）に及ぶ影響です。

- ・「中・EUの包括的投資協定の大筋合意」（1/4）

<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=9013>

中国から制裁を科された欧州議会のフランス人議員が所属する政党S&Dは、CAIの承認の条件として、欧州議会議員への制裁解除を挙げています。制裁解除が実現する見通しはまったくなく、また北京オリンピックに向け、欧州は中国にさらに厳しい目を向けるようになるでしょうから、CAI承認のスケジュールは大幅に遅くなるでしょう。もともと手続き的な観点から、本年中の可能性は低かったのですが、22年でも、少なくとも北京オリンピックが終わった後でないと無理だろうと思います。

あるいは、状況次第では、そのままずっと承認ができない可能性もあります。CAIを含む中国との経済関係の強化に熱心なのはメルケル首相とマクロン大統領ですが、メルケルは今年の任期満了によって退任し、次期首相がどのようなスタンスで臨むのか不透明です。マクロンは22年前半にEU理事会議長を務めるので、そのタイミングが最もスムーズなのですが、先に述べたように、スケジュールが遅れる可能性が高いので、タイミングを活かせない可能性があります。

- イスラエル総選挙

イスラエル総選挙は、ネタニヤフ首相率いるリクードが第1党を維持したものの、ネタニヤフ陣営も反ネタニヤフ陣営もいずれも過半数を占めることができず、例によって連立交渉に委ねられる展開になりました。3月

31日に最終結果がリブリン大統領に提出され、4月7日までに同大統領が首相候補を選ぶことになります。

状況は不透明ですが、反ネタニヤフ連合が政権を樹立する可能性は低いです。最大野党となった「イエシュ・アティド」（「青と白」から離脱して発足した新政党）のヤル・ラピッド党首は野党をまとめられるリーダーとは見られず、しかもアラブ系政党の支持も得なければ過半数に達しないからです。

ネタニヤフが連立政権を樹立できるとしても、ギリギリ過半数かアラブ系政党の閣外協力を得た少数政権で、その政権基盤は極めて脆弱です。短命に終わる可能性が高く、5度目の総選挙に至ることも予想されます。

●ミャンマー国軍記念日

ミャンマーでは国軍記念日に記念式典と軍事パレードが開催され、ミン・アウン・フライン国軍司令官が演説を行いました。式典にはロシア、中国、インド、パキスタン、バングラ、ベトナム、ラオス、タイの8か国が参加しました。

国軍のデモ弾圧は続き、国軍記念日当日の死者は100人を超えたと伝えられています。今後の見通しについては以下の記事で述べたとおりですが、日本の対応について補足します（※メルマガに限定）。

- ・「ミャンマー国軍記念日」（3/22）
<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=9184>

国軍記念日での1日あたりの死者は過去最大に上りました。これ以上に大規模な弾圧が起こることも危惧されていたとはいえ、犠牲者は増え続けています。

わずかな朗報は、国軍記念日の前に国軍が2度にわたり合計1,000人近くの拘束者を解放したことです。クーデター以後、初めて国軍が見せた軟化の動きといえます。とはいえ、おそらく国軍記念日の前に抗議活動の沈静化を狙ったものなので、これをもって暴力の停止を期待することは困難です。

これまで述べてきたとおり、抗議活動や制裁で国軍を倒すことは現実的に不可能です。まず何よりも優先すべきは、国軍の暴力を停止させ、アウンサン・スーチー氏らを解放させることです。そのためには、国軍が主張するように、選挙の不備や制度を見直し、再選挙を行うことを認める他ないでしょう。

そうなれば、国軍が実質的に権力を握る擬似的な民主制になりますが、NLD前政権も、実質的には国軍と文民によるパワー・シェアリングの体制でした。再選挙後は、さらに国軍寄りの体制になってしまいますが、それでも、そこを出発点にして、再び辛抱強く実質的な民主化を目指すということです。残念なことではありますが、現実的にみて、事態を改善する道はこれしかありません。

そのために日本や国際社会が何をすべきかが問われますが、この点について、前回の記事で述べたとおり、日本はなぜ国軍に制裁を行わないのか、制裁を行わないことでミャンマー市民の対日感情は悪化している、日本は現地で国軍との「パイプ」があるといいながら何もやっていない、ミャンマーに中国が引き寄せられるのを恐れているというのは言い訳だ、本当は日本企業の利益を守りたいだけだ・・との主張を見かけます。

しかし、私は、こうした主張に同意できません。なぜなら、「国軍がやっていることは人権侵害であり、ミャンマー市民が制裁を求めているから、制裁をすべきだ」という道義的観点から主張しているだけで、その先にある結果を何も考えていないからです。

日本が制裁に加わり、国軍を追い詰めることで、暴力の停止が実現するのであれば、そうすべきです。しかし、そうした見通しは立っておらず、それどころか、国軍を袋小路に追い込むことによって、かえってさらなる暴力を生む可能性すらある。その中で、ナイーブな正義感だけで、現実的な計算もなく、ゼロか100かという思考でいたずらに制裁を説くことは、無責任ではないでしょうか。

日本が制裁に加わらないのは、ミャンマーに中国が引き寄せられるのを恐れている、日本企業の利益を守りた

いからだ、との見解にも違和感をおぼえます。なぜなら、制裁を行わない最大の理由は、それによって暴力の停止を実現する道が狭まってしまうことだからです。

国軍の暴力を止めるためには、制裁で圧力をかけるだけでなく、対話を通じて説得することが必要なことに疑いはありません。そして、まともな民主国家で、アウンサン・スーチーをはじめとするNLDらの民主派やマンマー市民から信頼されながら、同時に、国軍とも良好な関係を築いてきたのは、世界広しといえど日本だけです。

国軍の非道は明らかであり、一片の同情の余地もありません。日本も、クーデターや暴力、アウンサン・スーチーや抗議活動参加者の拘束を強く非難しています。しかし、だからといって、対話まで閉じてはいけません。誘拐犯がいくら極悪非道であっても、警察は人質を解放させるために交渉を行います。その過程で、プロの交渉人は、おかしな話に聞こえるかもしれませんが、誘拐犯と「信頼関係」を築くことを求められます。マンマー国軍との関係でも、同じような「交渉」が求められるわけです。

そうした中で、日本が欧米と同じように制裁を実施すればどうなるのか。日本だけが維持していたユニークなアドバンテージは失われ、国軍と交渉にあたることができる民主国家はなくなるでしょう。そうすると、国軍はますます態度を硬化し、弾圧を強めると予想するのが合理的です。実際のところ、ミン・アウン・フライン国軍司令官は、すでに日本を西側陣営と同一視しつつあり、コンタクトが難しくなっているとも聞きます。

また、米国も、本音では、日本に対しては、制裁で圧力をかけることよりも、国軍を説得することを期待していると考えられます。国務省の報道官は、クーデター直後に、「米国には軍政とのコンタクトがないが、日本とインドにはあると聞いているので、期待している」と述べています。

米国もEUも、国軍を強く非難しながらも、制裁はターゲットを絞って慎重に行っており、マンマーが軍政だった頃の制裁のレベルにはまったく達していません。バイデン政権には、オバマ政権時代のスタッフが多く、圧力だけでなく関与によってマンマーの民主化を実現したことを政権の重要なレガシーと考えています。

それだけに、彼らは、建前では国軍を全力で非難しながらも、政策面では現実的観点からバランスをとろうとしています。そうした状況を考えれば、日本には、先に述べたユニークなアドバンテージがあるのだから、それを活用して欲しい、と考えているとみるのが合理的でしょう。いわば、「悪い警官（バッド・コップ）と良い警官（グッド・コップ）」、「制圧者と交渉人」という役割分担の問題なのです。

ジャーナリストや人権団体であれば、状況の悲惨さや「市民の声」を伝えるのが責務であり、国軍の耐性や国際政治への配慮をする立場にはないですから、国軍への追及をひたすら訴えることも理解できます。しかし、たとえば「国際政治学者」が、こうした現実的な視点もなく、ナイーブに正義だけを説くのはいかなものか・・・と思います。

なお、先に言及したとおり、民主国家でありながらマンマー国軍ともコンタクトのある国家として、日本の他にインドも挙げられます。たしかにインドと国軍の関係は昔から深く、また隣国であるインドには地政学的にもマンマーを取り込む必要があるので、独自の影響力をもっています。

しかし、それにしてもインドは、国軍に傾斜し過ぎのように感じます。中国やロシアのように内政不干渉を強調し、クーデターへの非難を控え、国軍記念日にも代表団を参加させています。ここまで国軍側に立ってしまうと、米国からも問題視されるでしょう。国軍とのコンタクトを維持する民主国家がいることは非常に重要なのですが、もう少しバランスをとらないとまずいのではないかと思います。

今週の動き

・パラオ大統領が訪台（～4/1）

3/29（月）

- ・ジョージ・フロイド氏の暴行死事件で第2級殺人罪で起訴されたデレク・ショービン被告人の公判
- ・中国全人代常務委員会（～30日）

3/31（水）

- ・バイデン大統領がペンシルベニア州ピッツバーグを訪問

4/1（木）

- ・OPECプラス（オンライン）

4/2（金）

- ・グッド・フライデー（聖金曜日）

（今週のどこか）

- ・日米韓実務レベル協議（ワシントンDC）

●バイデンのピッツバーグ演説

バイデン大統領は、来週水曜日にピッツバーグで講演を行い、インフラ投資計画について説明する予定です。おそらくグリーンエネルギーとインフラ計画を主な内容とする3兆ドル規模の民主党の計画に沿った案を示すのでしょう。このスピーチが第3四半期まで続く予算プロセスの実質的なキックオフになると思います。

あとがき

映画『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』を見てきました。

オンラインサロンでも盛り上がっていて、ネタバレのような話が飛び交い、早く見なければ・・・という切迫感もあり（笑）、仕事の合間に抜け出して、見てきました。

いやあ、すごかったですね。私などが言うまでもないことですが、こちらの想像のはるか上をいく映像と展開、なつかしい場面も畳み掛けるように出てきて、まさに「ありがとう、エヴァンゲリオン」という気持ちで見終わりました（※長くなってしまったので、ここから先はメルマガに限定します）。

私がエヴァのことを知ったのは大学生の頃、たしか96年なので、最初のTVシリーズが終わった直後の頃だったようです。最初に見たのはレンタルビデオ店で、ビデオ（DVDだったかも）のジャケットのプラグスーツ姿のレイが気になって（「萌えた」ということでしょう）、作品のことを何も知らずに借りてみたのでした。CDのジャケ買いのようなものです。

正直なところ最初は、絵がきれいで今風のアニメな感じがするけど、キャラデザインは『オネアミスの翼』の人なのか、OPがかっこいいな、くらいの印象でした。しかし、すぐにストーリーの複雑さや謎めいた展開（OPから伏線が散りばめられていますが、これすら当時は衝撃でした）、さらに衝撃的なエンディングを知り、気になって仕方なくなりました。劇場版2部作が製作されると聞いて、「なるほど、これはイデオンの『接触篇』『発動篇』と同じパターンだな」と思いつつ、劇場に足を運んだものです。そして、またエンディングに衝撃を受けました（笑）。

そういうわけで、比較的初期から見ていたのですが、といっても、そこまでディープなファンというわけではなく、むしろ世間の異常なまでの盛り上がりには驚いた記憶があります。90年代後半の頃は、アニメのことを大人がおおっぴらに話すのははばかれるような雰囲気が残っていたと思うのです。それが、エヴァについて

はまったく感じられなくなりました。それどころか、最先端のクールな文化であって、知らない方がダサい、というぐらいの評価になっていたと思います。時代の変化を感じたものです。

とはいえ、私自身はそこまでのめり込んでいなかったのも、新劇場版がやると聞いたとき、「うーん、また第1話からやりなおすのか・・・どこまで引っ張るのだろうか」と思ったものでした。それでも、やはり見に行ってしまうのですが（笑）。そして、さすがのクオリティだ、宇多田ヒカルの歌も素晴らしい、でもこれ、また最後はどうなるのか、また放り出されるのではないかと（笑）・・・と不安を感じたものです。おそらくみんなそう思っていたのでしょけれど（苦笑）。

しかし、今回は、もう本当に素晴らしかったですね。正直、私には理解不能な部分がたくさんありますし（「●●司令」とか）、旧版のように解釈や論争が色々あるのですが、映像と展開だけで十分に満足しました。エンディングも、今回はスッキリしました（笑）。

それに、最後のメッセージは、たぶん旧劇場版と同じなんですよね。本当の主演であろうゲンドウの心理も、これまでになくクリアになっていて、まさにこれが庵野監督の思いであり、前回も今回も、最終的に言いたかったこと（リアル世界に帰れ）は一貫していたのだな、と私なりに納得しました。

そんなわけで、庵野監督としては、自分自身もファンも、これで晴れてエヴァから卒業・・・というお考えだったと思うのですが、私としては、映画に出てくる初期の場面を見て、すごくなつかしい気分になり（大学生の頃の思い出もよみがえり）、もう一回最初から全部見直そうかな、という気分になりました（笑）。まったく卒業できないようです。まあ、いいですね。

The Gucci Post (Copyright 2021 グッチーポスト株式会社)

- Twitter <https://twitter.com/JDWorldBriefing>
- ブログ <https://guccipost.co.jp/blog/jd/>
- メール jd.world.briefing@gmail.com
- 編集部 inquire@guccipost.co.jp

※本メルマガの内容は、筆者の個人的な見解であり、他のいかなる個人の見解を代表ないし代理するものではなく、他の個人または組織がその内容に対して責任を負うことはありません。